

## 2 保護者と繋がる

## 雑草生やそうプロジェクト～一緒に活動する～ 3・4・5歳児 社会福祉法人砂原母の会 砂原保育園

2月、大量の土砂で園庭の真ん中に山を作った。保育者は、土嚢袋で土砂が流れないように土留めを行った。そして、子どもたちとジャガイモを植えた。5月に入ってすぐに芽が出てきた。子どもたちはそれぞれに「ここは僕が植えた所だ」と芽を見に行く。触ってみると「固い」とジャガイモの芽の固さに驚く。5月末にはあっという間に砂山はジャガイモの葉で覆われた。

## 保護者の協力を得る



ジャガイモを植えたことで、今までにないくらいに園庭に緑が増えた。しかし、収穫すると緑はなくなってしまふ。このまま緑があったら…という思いが子どもたちと保育者にあり保護者に協力を求めた。

「家庭や公園で見つけた雑草を砂山に植えてもらい、子どもと一緒に登降園時に水をやってもらう」そんな取り組みを『雑草生やそうプロジェクト』と称し、「一緒に砂山を雑草山にしませんか」と呼びかけた。子どもたちは、散歩先の公園に行ったら雑草を抜いてきて親子で植えた。

## 育てる楽しさを親子で共有



5歳児の「森の日（5歳児が森に定期的に出かけ、四季折々の経験をすること）」の活動でもいろいろな雑草を持ち帰り植えた。ジャガイモを植えて生長する面白さを知っている子どもたちは何でも植えたがった。その声に応え、多くの保護者が参加してくれた。家からパンジーの苗を持ってきた家庭や、お迎えの際に毎日じょうろで水をやる家庭もあった。雑草山作りは、子どもと共有できる楽しみがあり、親子で会話し水やりするということがささやかな日課となり、ひと時の穏やかな時間となった。各家庭がいくつもの雑草を持ってきて植え、それが次第に広がり、雑草山にはジャガイモ以外の植物も増えてきた。

## 一人の子どもをみんなで見守る



夏、給食でスイカが出た。K児（3歳児）は「このスイカの種を雑草山に植えるんだ」と嬉しそうに話している。保育者は本当に植えるのかと半信半疑ながらも、スイカの育て方が載っている図鑑を用意し、K児に手渡した。母親も一緒に植えて朝や帰りに水をやり、生長を楽しみにしていた。親子で図鑑を見ながら、次に続く生長を楽しみにしていた。

しばらくしてやっと芽が出る。K児は「スイカの芽が出たよ！」と喜び、母親は「本当に芽が出るのですね」と驚きながらも、嬉しそうに園に報告してきた。

踏まれないようにその芽を小さな鉢に移し、雑草山のそばに置いた。そして栄養土がビニールを被せて、温度や湿度が保たれるようにした。

友達、保護者、保育園に携わる職員全員でスイカの生長を待った9月、咲かないと思っていた花が咲き、ますます喜ぶK児。親子でスイカを見ながら、これから先どう育つか調べ始めた。みんなに「スイカができたら分けてあげるよ」と誇らしげに言うK児がいた。

## &lt;考察&gt;

- 多くの保護者が雑草山に関わり毎日水やりをしている親子もたくさんいた。自宅の雑草、公園からとってきた雑草など、厄介な雑草も保育園にとっては貴重な自然遊びの材料となった。うまく根付いた時もあれば枯れてしまう時もあった。しかし子どもと一緒にすることは、大人にとっても、子どもの時には興味なかった虫や草に対して、気付きや学びの再体験となっていると思われる。
- 3、4歳児は「森」へは直接行っていなくても、雑草が育つことを楽しみにし、雑草山は子どもたちの身近な自然観察の場所になった。些細な取り組みではあったが、『雑草生やそうプロジェクト』は園全体に広がり、更には保育者や保護者の興味をも広げてくれるきっかけとなった。

雑草山に親子で関わるきっかけを作ったことにより、子どもも保護者も草花に興味をもち続け、発芽や生長を親子でよく観たり、変化を感じ取ったりなど、体験が深まっていることが分かります。「科学する心」を育むためには、このような子どもと保護者と保育者との温かい繋がりが根底にあることが大切です。